

## 庭園文化研究分科会 平成24年度活動総括報告

幹事 片山直樹

### 1. 活動目的（おさらい）

平成22年度に発足した「庭園文化研究分科会」は、今年度で活動3年目となりました。本分科会では、発足当初、以下の目的を掲げていました。

～活動目的～

- ① 県内各地に残される日本庭園を探訪し、その文化的価値を肌で感じるとともに、埋もれた名庭園を発掘する。
- ② 作庭技術や日本庭園が持つ文化的背景、精神性、庭園の見方などを学ぶ。
- ③ 地域資源としての活用や、文化財としての保全を考える。

つまり、「島根県には多くの日本庭園が残るが衰退している現状がある。このような現状を把握し、活用や保全を考える」ことが、大雑把な活動目的と言えましょう。

### 2. 研究対象（おさらい）

さて、島根県には様々な日本庭園があります。例えば、足立美術館の日本庭園（米国の日本庭園専門誌で2012年も日本一に輝き、10年連続の庭園日本一）のような比較的新しく有名な庭園もあれば、寺院や個人が所有する無名だけれど古い歴史をもつ庭園もあり、その歴史、そしてそれに伴う作庭様式は多岐にわたります。

このため、本分科会では活動初年度に、対象とする庭園様式を「出雲流庭園」に絞り活動をスタートし、今年度までの延べ3年間、研究活動を行ってきました。

出雲流庭園。おそらく、出雲地方に住む人でもあまり耳にしたことが無いのではないのでしょうか。出雲流庭園という言葉は実際にあるのですが、実はその定義が明確ではありませんでした。このため、本分科会では、活動初年度から出雲流庭園と呼ばれる庭園、あるいは関連する庭園について視察を重ね、共通するパターンや特徴を見出し、「出雲流庭園とは何か？」を明らかにする方向性での活動が主であったと言えます。

また、本分科会では年度毎に活動内容を集約して“ひとつの結論”を出すようなことをしませんでした。これは、日本庭園を題材として扱っていることによります。

日本庭園は非常に繊細で、人の精神世界を表現したもの、あるいは観たものの内面を映し出す鏡のようなものだと、私は考えます。つまり、100人観たら100通りの感じ方があるかと思いますが。

したがって、ひとつの結論を出すこと自体が適さない研究対象であると言えます。逆に、一方的な見方を強いた場合、それぞれの想像性を邪魔し、多様性のある結果を得ることはできなかつたでしょう。

### 3. 平成 24 年度の活動

さて、活動 3 年目を迎えた今年度は、視察会を 2 回に分けて行いました。概略的な内容についてを表 1 に、視察した庭園の位置を図 1 にまとめます。

表 1 平成 24 年度の庭園視察概略表

視察回数 (参加者数)	視察 順序	箇所名称	特 徴
H24. 9/22 第 1 回 (23 名)	1	庭園 1	・ 個人所有の庭園（築地松あり） ・ 立派な築地松に囲まれた宅地の南西に庭あり
	2	庭園 2	・ 個人所有の庭園（築地松あり） ・ やや大きい庭石により立体感が強い
	3	庭園 3	・ 個人所有の庭園（築地松あり） ・ 寿形のクロマツが中央にあり印象的
	4	松翠苑	・ 料亭の庭園（300 坪余り） ・ 出雲流の技法が随所にみられる
H24. 12/1 第 2 回 (12 名)	5	蓬莱吉日庵	・ 料亭の庭園 ・ 市中の山居を強く感じられる特別な空間
	6	松江歴史館	・ 随伴頂いた庭師角氏が設計で出雲流技法あり ・ 松江城天守が借景
	7	庭園 4	・ 個人所有の庭園 ・ 出雲流の技法が一部あるが、典型的ではない
	8	松源寺	・ 寺院の庭園 ・ 出雲流ではなく、池泉回遊式庭園
	9	乗光寺	・ 寺院の庭園 ・ 出雲流ではなく、枯山水庭園

※個人所有の庭園はプライバシー保護のため「庭園 1」のように表記しています。

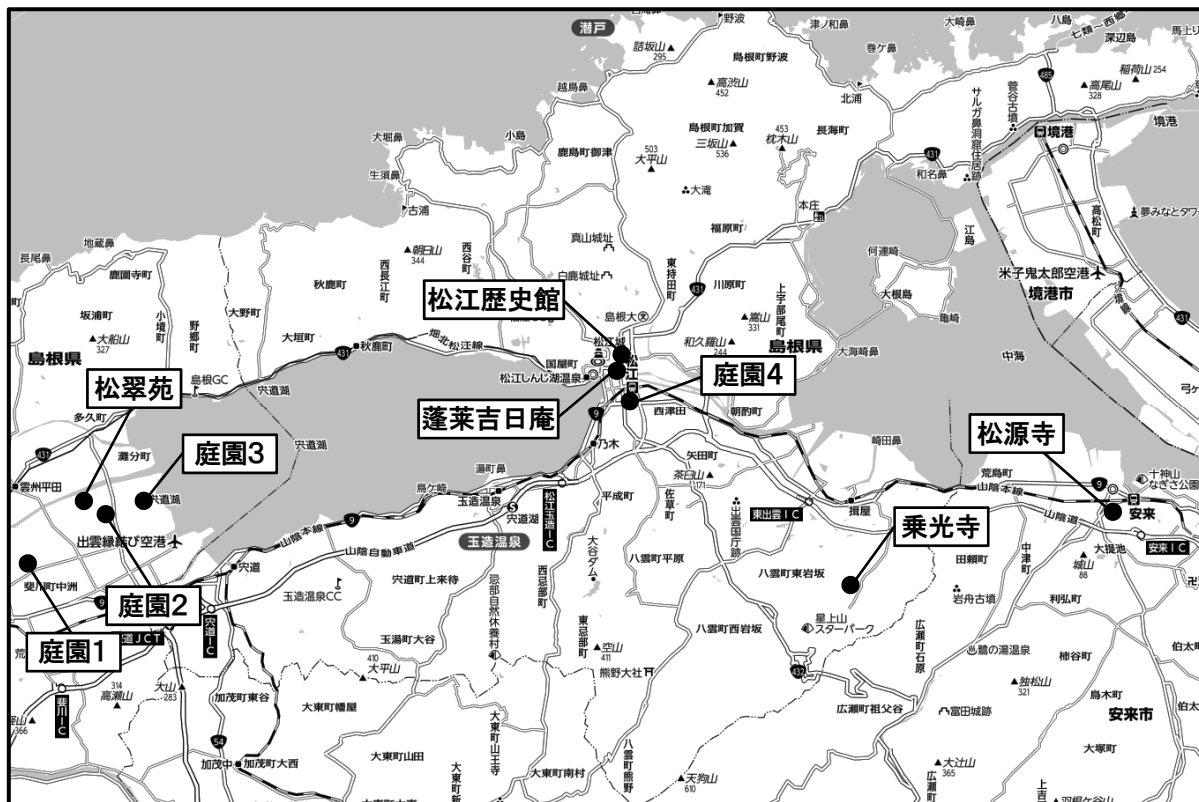


図 1 平成 24 年度の活動で視察した庭園位置図

### (1) 第1回視察会

第1回視察会は、蓋を開けてみれば参加者数23名となり、非常に驚いたとともに、庭園に興味がある人が実は多く存在する事実に嬉しく思いました。

第1回視察会では、普段は拝観謝絶の個人庭園を3か所回ることにし、また、その後の昼食会場として1日で昼夜各1組ずつしか受けない料亭「松翠苑」としたことも、参加者多数となった大きな要因かと思えます。

また、もう一つの目玉として、現役の庭師である三島さんに各庭園に随伴していただき、庭を目の前にして講釈をしていただけたことも、多くの参加者を得た要因でしょう。

以下に、各庭園の概要をまとめます。

#### 〔庭園1〕

伺ったお宅は、家屋の西～北側を築地松がぐるりと囲っており、昔ながらの出雲平野の民家のスタイルを保った家屋でした。

庭は家屋の南～南西に面した位置に配置され、枯山水様式を主体とし白い敷砂が敷き詰められています(写真1)。庭石も高く据えられており、これらの様式は典型的な“出雲流”と考えられています。



写真1 庭園1について説明してくださる三島氏

#### 〔庭園2〕

この庭園も家屋の西～北側を築地松が囲っており、出雲平野の民家の様式を保っていました。

やや大きい庭石を置き、それを土留めのように用い、敷砂の大海に浮かぶ島のような表現がなされており、平庭主体の出雲流庭園に立体感をもたらしていました(写真2)。



写真2 庭園2は比較的大きな庭石が印象的

### 〔庭園3〕

庭園2に近い印象を受けましたが、全体的に用いられた庭石が比較的小さく、より繊細なイメージを与えるような庭園でした。

また、本庭園で特徴的でしたのが、庭園のほぼ中央に位置するクロマツで、漢字の“寿”を象った形状をなしています(写真3)。三島さんの話では、これも出雲流の一つの特徴とのことでした。

なお、庭園1と2にも寿形のマツはありましたが、個人的には庭園3のものがわかりやすく立派と思いました。



写真3 庭園3のほぼ中央に位置するクロマツ

### 〔松翠苑〕

昼食会場として松翠苑を利用しました。松翠苑には300坪余りの庭園があり、庭を觀賞しながら食事が楽しめる料亭です。

松翠苑に到着後に、まず広間に通され、そこで抹茶をいただきました。各人の茶碗がそれぞれで異なっており、抹茶の風味を味わいながら、目も楽しませていただきました(写真4)。

その後、庭園が見える座敷にて食事をいただきました。庭園は、短冊石や白石を組み合わせた飛石が白い敷砂の中に設えられ、全体的に緑量が少なく、石灯籠などの茶庭(露地)のテイストも見られ、出雲流の技法が随所で確認できました(写真5)。

料理についても、普段口にすることができないような繊細な味付けを味わうことができ、五感で楽しませていただけ非常に満足しました。おすすめの料亭です。



写真4 最初に広間で抹茶を(皆が飲んだ後)



写真5 出雲流の特徴豊かな庭園を觀ながら食事

## (2) 第2回視察会

第2回視察会では、前回よりも参加者数は減ったものの12名と、研究部会の活動参加者数としては比較的多かったと言えます。

第2回視察会は開始をやや遅くし、昼食兼ミーティングからのスタートとしました。昼食会場は、日本庭園を鑑賞しながら食事をする事ができる庭園料亭「蓬莱吉日庵」です。

昼食後は、松江歴史館の庭園を観て、松江市内の個人所有の庭園を1か所拝観させていただき、その後、安来市の「松源寺」と東出雲町の「乗光寺」の2か所の庭園を拝観しました。

なお、今回の視察会でも庭師の方にご同行いただきました。今回は、松江歴史館など多数の庭園設計を手掛けられた角さんに、各所で庭についての講釈をしていただきました。

以下に、各庭園の概要をまとめます。

### 〔蓬莱吉日庵〕

松江市殿町にある蓬莱吉日庵は、かつては料亭旅館「蓬莱荘」として営業しており、島根県初の政府登録国際観光旅館に認定された旅館でした。その後、紆余曲折を経て現在の形で庭園料亭として蘇ったところです(写真6)。

殿町はご存知の通り、周囲にオフィスビルやマンションが立ち並んでおり、そんな中にひっそりと日本庭園が残っている不思議さにまず驚きを感じました。まさに、茶庭(露地)の根本思想である“市中の山居(町中に居ながらにして山中の風情を楽しむこと)”です。

ただ少し残念なことに、周囲に高いビル等があるため、視線を上げるとこれらが飛び込んできて、風情の無い“借景”となってしまいます(写真7)。

しかし、このことが市中の山居をまた強く意識させる一つのエッセンスともいえ、ものは考えようかもしれません。



写真6 蓬莱吉日庵の日本庭園(歩いて回れます)



写真7 視線を上げればマンションが…(借景?)

〔松江歴史館〕

松江歴史館の庭園は、今回ご同行頂いた庭師の角さんが設計された庭園です（写真8、図2）。

出雲流の技法が随所に見られますが、溜池が中央にあることから斐川平野の典型的な出雲流庭園とは異なった印象を持ちます。

また、この庭園の大きな特徴として、松江城天守を借景としていることが挙げられます。



写真8 角さんの講釈を聞きながら庭園を観る

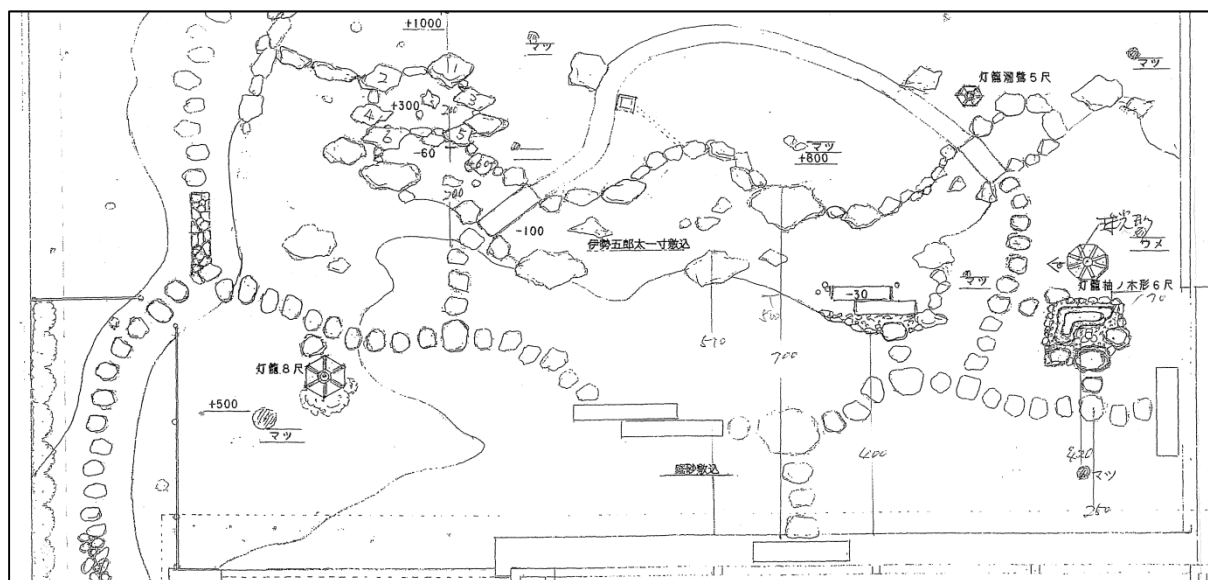


図2 角さんによる松江歴史館の庭園設計図

〔庭園4〕

角さんが作庭された個人所有の庭園です。比較的大きな庭石を配置し、雛壇のように立体的な造形が印象的で、出雲流庭園とは異なる様式と思えます（写真9）。

ただ、寿形のクロマツや短冊石などの出雲流の技法もあり、なかなか様式がわかり難い庭園と言えます。

また、庭石に近辺では採れない蛇紋岩などの庭石があり、贅を尽くした庭であることを感じさせます。



写真9 大きな庭石を配した立体的な庭

〔松源寺〕

松源寺は JR 安来駅から南西へ約 500m の地点にある曹洞宗の寺院です。

本堂の裏手の斜面との限られたスペースに池泉を主体とした庭園が佇んでいました。池泉の背後からは滝が流れる仕組みとなっており、斜面を活かした立体的な作りとなっていました（写真 10）。このため、出雲流庭園とは異なる様式の庭園と言えます。

また、松源寺は陶芸家“河合寛二郎”の菩提寺とのことで、寛二郎の作品もいくつか拝見することができました。

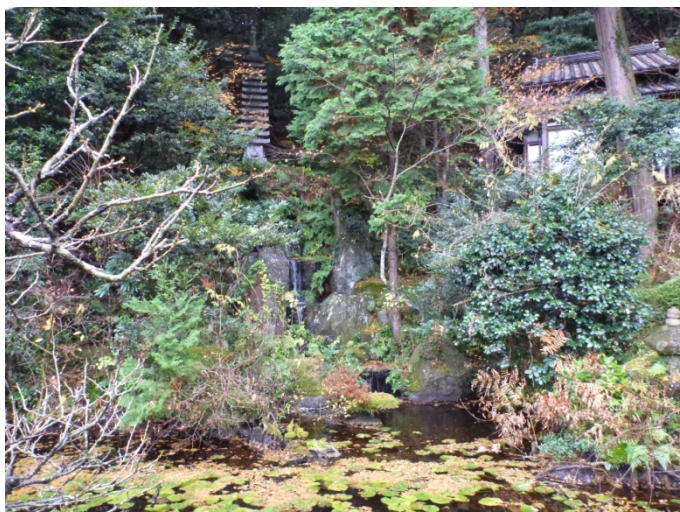


写真 10 庭の中央を広く占める池と背後の滝

〔乗光寺〕

乗光寺は東出雲上意東にある真言宗の寺院です。

山門をくぐると、イチョウの落ち葉が敷砂に描かれた同心円状の紋様に沿って溜まっており、非常に面白い景色を作り出していました（写真 11）。

寺の住職に伺うと、意図的に砂紋の凹凸を大きくし葉が溜るようにしたとのことで、こういう落ち葉の利用法もあるのだなと感心しました。

本堂裏手の庭園は、斜面までの平地に飛石を配し、その奥の斜面裾にサツキなどの庭木と庭石を据えた枯山水庭園です（写真 12）。

この庭園でも、出雲流の技法がほぼ認められず、出雲流庭園とは異なる様式の庭園と言えます。



写真 11 イチョウの葉と敷砂とのコラボ

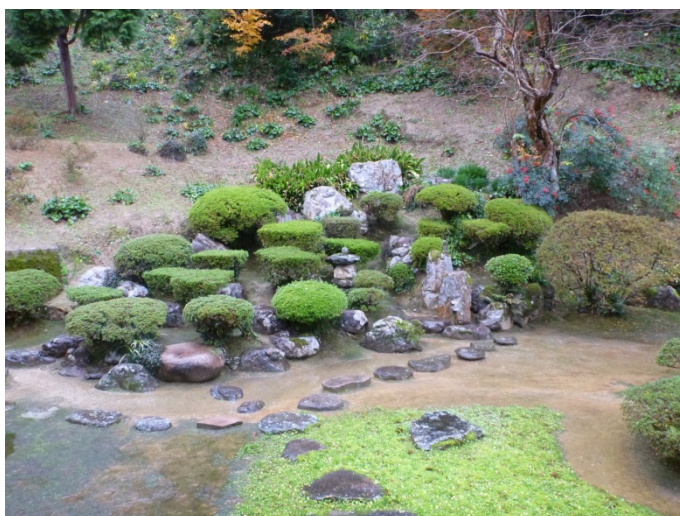


写真 12 乗光寺の庭園

[ぺあせろべ2012]

平成24年10月28日に、広島市で行われた国際交流フェスティバル「ぺあせろべ2012」に、今年度も島根県技術士会青年部会が参加しました。今年、島根県技術士会の研究部会の活動をPRするために、各分科会のポスターを展示する試みがなされました。そこに、庭園文化研究分科会もポスターを作り、展示していただきました。

内容としては、ただ漫然と「～しました」のような形式ではなく、今テーマとして扱っている“出雲流庭園”に興味を持ってもらうことを意図した構成としました。図3に概要を示します。

島根県技術士会研究部会活動報告

出雲地方に残された庭園は、この地の歴史・風土・人間性が生み出した様式古く、新しい「出雲流庭園」と出雲に出雲に行こう！



典型的な出雲流庭園といわれる「原島江角部庭園」。庭山水を基本とし、高木に隠された飛石や長方形の礎石が並び、その周囲には白い敷き砂が敷き詰められている。庭の西-北側の周囲には冬の強い西風を防ぐ築地松が覆う。

また、松平不昧は一流の茶人として知られていますが、その影でこの時代に造られた庭園は茶室を設けられたものが多くあります。ここに、出雲流庭園が築地（築地）あるいは枯山水の形式をとっている一つの理由があるといえます。

**風土的背景**  
出雲平野の冬は、晴れる日はほとんどなく、北西からの季節風が強いことが特徴です。それから、昔は今よりも雪深かったとされます。

これらの風土の影響も、出雲流庭園の様式に強く影響を与えています。例えば、季節風の風除けである築地松、これは建物の西から北を囲うため、庭を置く位置は建物の南から南西側に決まってしまう。また、このことにより南側に開放されたスペースが造られ日光を多く建物内に取り込むことができ、合理的であったといえます。また、庭に敷き詰められている白い敷き砂は、建物内に反射光を取り入れることを狙ったものとも考えられています。

また、松平不昧は一流の茶人として知られていますが、その影でこの時代に造られた庭園は茶室を設けられたものが多くあります。ここに、出雲流庭園が築地（築地）あるいは枯山水の形式をとっている一つの理由があるといえます。

**一、出雲地方特有の日本庭園**  
出雲大社のお歴所である島根県の出雲地方には、シジミの産地として有名な穴瀬湖や、その四方に広がる高大な出雲平野などがよく知られています。

また、中国山地に源を発する一級河川斐伊川は、出雲平野を蛇行し、たびたび氾濫し洪水をおこすことからも言われており、出雲地方の神秘的な成り立ちを一層盛り上げています。

このような地方に、江戸時代に発したといわれる「出雲流庭園」と呼ばれる日本庭園が連綿と受け継がれていることをご存知でしょうか。

**二、出雲流庭園のお二り**  
出雲流庭園は、出雲地方の歴史や風土、そして人間性がとけあい、醸成され、形づくられた庭であると考えられています。

出雲流庭園は、出雲地方の歴史や風土、そして人間性がとけあい、醸成され、形づくられた庭であると考えられています。

**三、出雲流庭園のいま**  
出雲流庭園は、全国的に一般的ではないばかりか、実は地元の出雲地方でもあまり知られていません。これは、意識なくとも出雲平野の庭の多くは出雲流の作庭様式であり、普段の生活にとけこみ、自然と親しまれているからともいえます。しかし、現代の生活様式の変化もあり、築地松や出雲流庭園は徐々に減少しており、出雲の古き良き景観はなくなりつつあります。

島根県技術士会研究部会では、地域活性化の一環として、出雲流庭園の成り立ちや特徴を研究し、その独特さや希少性などの情報発信を行い、地域活性化の一つの資源として活用してまいります。

出雲地方の観光客の増加に伴い、出雲大社や玉造温泉などに訪れる際に、少し足を伸ばして、この地の歴史や風土を今に伝える出雲流庭園に出会いに行きませんか？

これまでの研究成果はQRコードより！  
島根県技術士会 研究部会  
庭園文化研究分科会



古来の出雲流庭園には、茶室を併せ持つ場合が多く、松平不昧公の影響を受けたことを物語る。



出雲流では、飛石はやや高く設えられ、敷き砂は白を基調とすることが特徴。

また、松平不昧は一流の茶人として知られていますが、その影でこの時代に造られた庭園は茶室を設けられたものが多くあります。ここに、出雲流庭園が築地（築地）あるいは枯山水の形式をとっている一つの理由があるといえます。

**風土的背景**  
出雲平野の冬は、晴れる日はほとんどなく、北西からの季節風が強いことが特徴です。それから、昔は今よりも雪深かったとされます。

これらの風土の影響も、出雲流庭園の様式に強く影響を与えています。例えば、季節風の風除けである築地松、これは建物の西から北を囲うため、庭を置く位置は建物の南から南西側に決まってしまう。また、このことにより南側に開放されたスペースが造られ日光を多く建物内に取り込むことができ、合理的であったといえます。また、庭に敷き詰められている白い敷き砂は、建物内に反射光を取り入れることを狙ったものとも考えられています。

**人間の背景**  
人の性格にはいよめる国民性があるのですが、出雲人の性格には茶室流庭園が成立した二つの要因があると考えられています。

一、出雲地方には「内向的で神経質なタイプが多く、また、傷つきやすいで周囲との接触を避け積極性が無い」という特徴があります。このような性格は権威や秩序を重んじて、革新的な物事には戸惑いを見せるともいえる、このような性格であるがゆえに、江戸時代後期におこった出雲流庭園の文化を成熟させ、作庭様式のパターンが形成された大きな要因であるとも考えられます。

図3 出雲流庭園に興味を持ってもらうことを意図したポスター（実寸はA2版）

#### 4. 今後の課題

最後に、本分科会の活動目的に戻りますと、現段階は「出雲流庭園の現状を把握した」状態といえ、最終目的である「その活用や保全」を検討する段階には至っていません。

したがって、今後は「地域資源としての活用や、文化財としての保全を考える」部分について、具体的な活動を行う必要があるかと考えています。

おそらく、次年度以降も本分科会は継続して活動を行っていくことと思います。また、今後は出雲流庭園とは違う様式の庭園を研究対象とすることが考えられます。

しかし、最終的にはそれらの活用・保全について何らかの言及を行っていくことが、本分科会に求められていることと思います。つまり、これまで“発散的に”行われた研究成果を整理・統合し、活用・保全のための方策を検討することが、今後の課題と考えます。

—以上—